

野澤 日出夫*

2016年12月4日受付, 2016年12月5日受理



(創業明治24年・4,000ha)

- ・ 創業者三人の頭文字をとって「小岩井農場」と名づけられる。
- ・ 農場主は井上勝。岩崎は出資者、小野は保証人。



小野義真
(日本鉄道会社副社長)



岩崎彌之助
(三菱社社長)



井上勝(野村弥吉)
(鉄道庁長官)

伏流水が湧き出る湿原の痩せ地で、殆ど樹木も育たない場所でありました。井上長官は幕末に英国に密航した「長州ファイブ」の1人、鉄道学・鉱山学をロンドン大学で学び、明治維新後帰国、鉄道建設に力を注ぎ「鉄道の父」とも言われています。多くの美田良圃森林自然を鉄道敷設で失わせた償いに、この荒野を農場に変えたいとの志

– 52 –

で、鉄道会社副社長小野義真の計らいにより、三菱 2 代目当主岩崎彌之助が事業資金を出し、順次 4,000ha の未利用地を入手して 1891 年「小岩井農場」が創設されました。当時華族階級が国からの払い下げを受けて開拓した、千本松農場（松方正義）・山縣有朋農場・華族組合雨竜農場（5 万石三条・蜂須賀ら）などとは一線を劃します。1891 年より 1893 年にかけて、岩泉地方より在来種♀ × ショートホーン♂の交雑種 110 頭を購入（1872 年岩泉地方の在来種改良目的に米国よりショートホーン輸入）。家畜飼料作物の栽培を始めています。畜牛は繁殖・販売と共に畜ふん尿は、瘦せた圃場の肥沃化を図るのが目的でもありました。

農場のほぼ 1/3 にアカマツ・カラマツの植林を進め、ウルシ 3 万本・クワ 4 万 5 千本の植栽も創設当時行われています。しかし余りにも過酷な環境から経営の目途が立たず、1898 年、出資者の三菱 3 代目総帥岩崎久彌*に移譲されています（* 慶應義塾卒後ペンシルバニア大学留学、27 歳で三菱総帥継承）。この当時農場経営の範ともなる下総御料牧場の新山莊輔牧場長を招請・小岩井農場長兼任として経営指導に当たっています。

不毛の原野から農林畜産そして多自然農場

（土壌改良・暗渠排水・防風林・植林・飼料作物・畜産の推進）



（カラマツ・アカマツの植林）

（明治30年代の放牧風景）
・ホルスタインフリージアン種
・エアシャー（国の推奨品種）
・ブラウンスイス種

（岩崎家直営の牛馬改良の時代から、農場事業の自立）

明治政府の畜産振興政策を下支えする優良家畜改良事業を目指し、1901 年には、英国よりエアシャー種、スイスよりブラウンスイス種、オランダよりフリージアン種（*）の優良な乳用種牛を輸入し比較飼養を行っています。同時期英国よりシュロップシャー種羊も輸入されました。1902 年英国よりハックニー種馬輸入。（1903 年「小岩井発酵バター」発売）。1907 年軍馬改良目的に、英国よりサラブレッドを輸入、1913 年には「小岩井ハックニー（サラブレッド × ハックニー）」の生産を行っています。

（*オランダフリースランド原産・後にドイツホルスタイン州原産種と同一品種としてホルスタインフリージアン種と呼ばれ、その後通常ホルスタイン種と呼ばれる様になった）



シャンモア号 1927 年英国より輸入

重種馬ペルシュロン種もフランス・米国より輸入され改良が進められました。

ブラウンスイス種は、繁殖性と乳生産性が劣り 1913 年に使用を中止しますが、兵庫・鳥取の和牛改良に使用され大型化と産肉性を高める事に貢献しています。乳用種は 1918 年以降輸入先を、オランダから、カナダ・米国に変えています（乳肉兼用タイプから、乳用タイプへ）。エアシャー種は 1930 年で廃止し、以降ホルスタイン種に特化して育種改良が進められました。

1932 年「第 1 回日本ダービー」が開催され、小岩井産駒は 2 着、「第 2 回～4 回ダービー」では、種牡馬シャンモアの産駒が連勝しています。また、「第 10 回ダービー」ではセントライト号が優勝・日本初の三冠馬となり、現在も「セントライト記念レース」として名が残されています。

1938 年に至って「小岩井農牧（株）」が設立され、小岩井農場はその事業所として 40 年にわたる岩崎家庭事務所保護下の経営から自立を果たし現在に至っています。

（終戦・財閥解体・農地解放）

1945 年終戦、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の命により財閥解体と共に 1947 年第 1 次・1950 年第 2 次農地解放で約 1,000ha 余が満蒙開拓引揚者等へ払い下げられると共に 1949 年競走馬生産の育馬部門も、生産的な家畜ではないとの理由から廃止となりました。

翌 1950 年日本に於ける家畜改良の実績が評価され農林省より「指定牧場」として存続許可され、現在の 3000ha が残されました。

（私の入社以降の取組み）

1962 年野澤の入社、ホルスタイン種育種改良部門の小岩井農場種牛部着任、同時期農産部門において肉牛及び乳牛の放牧主体粗放的飼養試験が開始され、120 頭規

模でのミルクパラー搾乳が行なわれました（所謂 NZ 方式）。

一方卵黄クエン酸希釈液による冷蔵精液の販売を 1963 年に開始すると同時に、凍結精液開発に取組み、希釈液・耐凍剤・精液容器・識別方法・保存方法など課題として取り組み実用化。1967 年 KOIWA BREEDING SERVICE を設立し、北海道以外で初めて液体窒素保存・ストロー法での凍結精液・液体窒素（LNG・-196℃）販売を東北・関東甲信越をエリアとして事業化展開を図りました。この時期、国交正常化前の中国に向け「友好商社」を通じて凍結精液の試験輸出を行なっています。（精液輸出目論みが、凍結精液保存容器の大量輸出につながる）。この事を切掛けに、小岩井農場の優良な種牡牛 1 頭を中国に輸出しました。

1972 年日中国交正常化後、1974 年 11 月～12 月、「北京／日本農林水産技術展」が開催され三菱グループ訪中団の一員として小岩井農場も乞われて畜産分野として参加、中国に於いては凍結精液技術に関心が高く、全期間中国全土からの選ばれた技術者へのプレゼンテーションを隔日開催対応しました。1980 年北京市・大連市・天津市の人民公社に設置されている人工授精所からの要請で人工授精技術（凍結保存精液技術）指導のために再度訪中しています。（新疆ウルムチには移動許可が出ず断念しました）

（ブリーダーから多頭化酪農へ）

牛群検定が普及、その成績から供用種牡牛を選定し LNG による凍結精液供給が国境を越えて得られる時代となり、国の人工授精事業（社家畜改良事業団）の拡大もあり、1977 年小岩井農場における 70 余年にわたった種畜改良・種畜販売事業は終息、凍結精液販売事業からも順次撤退しました。

1976 年～1989 年、大型酪農システム情報を得るため、先進地オーストラリア・ニュージーランド・ハワイ州オ



1992 年建設の開放型半円集材牛舎

アフ島・米国中西部・カリフォルニア・カナダ・イスラエルなど度々視察を行い、1992 年寒冷地として異色な、小岩井農場独自の低コスト開放型 450 頭搾乳牛舎（24 頭ヘリングボーンパラー）の建設を行いました。2014 年には 600 頭に拡大、52 頭パラレル型ミルクパラーとコンピューター管理^(**)により飼養効率を高めています。（**イスラエル・アフィキム開発技術）

（受精卵移植・体細胞クローン牛生産）

1978 年農場内に受精卵移植タスクチーム 設置、特に乳牛の初産分娩の難産軽減を目的に、優良和牛受精卵移植をルーティン化し、現在の和牛生産・肥育事業につながっています。また（社）家畜改良事業団が主導した「家畜受精卵移植研究組合」に参画、移植技術を向上させると共に、乳牛臀部筋肉細胞から「体細胞クローン乳牛」3 頭の生産に成功、世界でもトップクラスの成功事例でありました。また農林水産省と協働でクローン牛乳チーズを全国ホルスタイン共進会（熊本）での試食に提供啓蒙を図りました。また、耳介細胞から 4 頭の和牛生産に成功しています。しかし消費者から遺伝子組換えなどと混同され不安視する人もおり、誤解を招かないようこの研究は中断しました。



体細胞クローン牛・コディーⅠ号・Ⅱ号

1997 年世界初の体細胞クローン羊「ドリー」

生産に成功して有名になったスコットランドのロスリン研究所を、1993 年に遺伝子組み換えによる「動物医薬品工場」の可能性を検討するため訪問、アバディーン・ロスリン研究所と、その事業化部門の PPL 社を訪問調査、人遺伝子組換え綿羊より人母乳特殊蛋白成分を含んだ綿羊乳生産に成功（トレシー）、クローン手法での増殖が狙い、この技術も小岩井農場としては事業化していません。



（**イスラエル・アフィキム開発技術）

(持続的環境共生型農場を目指して)

2001 年小岩井農場全部門で各部門ごとに環境マネジメントシステム (ISO14001) を取得、2003 年拡大審査により農場全域 3000ha 全てを管理し現在に至っています。



また持続型再生可能エネルギー検討のため、先進国・スウェーデン・デンマークなどを度々訪問調査。独立した事業として 2004 年第 3 セクター「(株) バイオマサーしずくいし」を設立、農場から 2 万トン以上の家畜ふんと、食品残渣受入れにより、4,000kwh/日の電力と堆肥・液肥を生産し、国内では注目される採算事業として成立しています。

また、廃天ぷら油を精製した BDF (バイオディーゼル燃料) を使う作業車 2 台が稼働しています。農場面積の約 2/3 が 100 年伐期の山林、約 1/3 を暗渠排水工事・堆肥・石灰投入などにより土壌改良された飼料作物畑となっていて、現在は飼料生産量に見合った約 2,100 頭の乳牛・肉牛・育成牛と約 120 頭の繁殖羊、また約 80,000 羽の採卵用種鶏を飼養し、年間約 450 万羽の♀雛を関東



バイオガス発電所

以北の養鶏農場に出荷する体制となっています。

農場内を流れる岩手山の伏流水を集める河川は、水質のバロメーターとも言われる「カワシンジュガイ」が棲息、サクラソウやミズバショウの群落が形成され、施業林には「オオタカ」も繁殖するなど、生物多様な環境が形成されています。

小岩井農場 3,000 ㌦の森林と牧草畑は、約 800 万トンの保水量と推定され、100 年をかけて造られた、いわゆる「緑のダム」が形成されています。



小岩井乳業（株）

牛乳処理工場（年間5万トンの処理能力）は全ての水は岩手山の地下伏流水が使われ、恵まれた環境の中に立地して、新鮮な生乳を処理・加工して、牛乳・ヨーグルト・チーズ・小岩井バターなどが製造され、毎日全国に配送されていきます。



小岩井乳業小岩井工場

小岩井農場の歴史を伝える文化財群

国重要文化財 21件 国指定名勝 1件

